

ふるまひとから挑戦

第48話 本物の誇り

②

(敬称略)

職人たちの自信とは裏腹に、「美川仏壇」を名乗る偽造品は一気に世の中に出回った。メーカーは海外に工場を設けて一層コストを抑え、販売店は本物並みの定価を付けたうえで、大幅な割引販売を始めた。

ばく品質の違いを訴えても、半信半疑の表情を浮かべるだけ。「正直もんが馬鹿を見るんか」。愚直に品質にこだわってきた職人たちに、無力感が漂い始める。

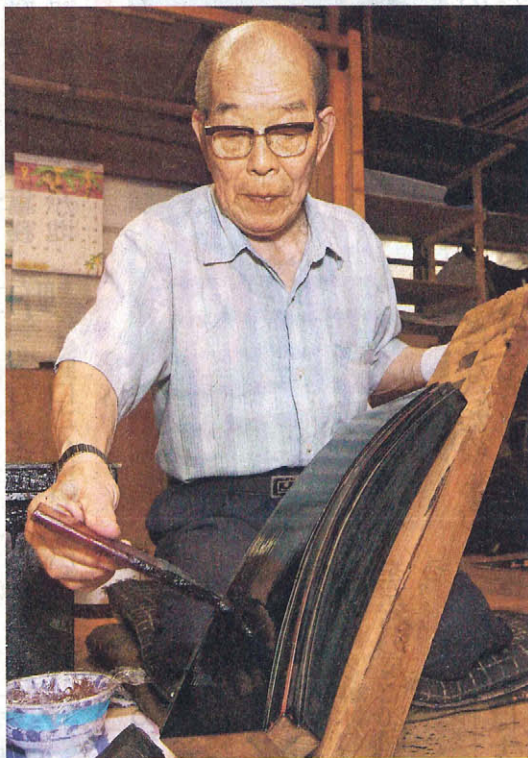
塗料に覆われた仏壇とはいえ、素人目で素材の違いを見抜くのは難しい。コピー品とは知らされず、大幅に値引きされた仏壇に消費者は飛び付いた。

割引せがむ客

「もっと安くできるやろ」。偽造品の7割、8割引を見慣れた客から、値引きを要求されることしばしば起きた。熱っ

他県の例だが、メーカーから合板の安い仏壇を買い入れ、地元で蒔絵や漆塗りを施して販売する産地もあった。労力は省け、在庫の融通も利く。売れば売るほどもうかる、そんなうま味のあるシステムに、業界全体が傾いていた。

伝統の技で対抗 決意の認定書



漆塗りを施す北島与八郎。偽造品の台頭に、職人たちは本物の技で対抗した—白山市美川新町

けて、確実にもつかる安い仏壇を扱わない手はない。しかし、父の3代目与八郎(78)は頑として首を縦に振らなかった。「わざわざこんな田舎まで来てくれたお客さんや。胸を張って説明できんもんは売らん」。

だ。ほかの店の職人たちも、本物を作り続ける道を選んだ。「ご先祖さまから受け継いだ技を絶やすわけにはいかん」。思いは一つになった。

る偽物も、消費者には分らないのが実情だ。そのコマツを主とする。化学塗料は使わないなど、七つの製造工程にそれぞれ基準を掲げた。そして、違反した組合員に対する罰則規定も明記した。

厳しい基準

1998(平成10)年、美川仏壇は認定書の発行を開始した。認定書には製造工程に携わった職人の署名とともに、実印が押された。下手をすれば、自分たちの首を絞めかねない厳しいハードルである。甘い誘惑を断つ厳然とした決意を込めた認定書を発行することで、偽造品を追い出す作戦に打って出た。

(藤本典子)